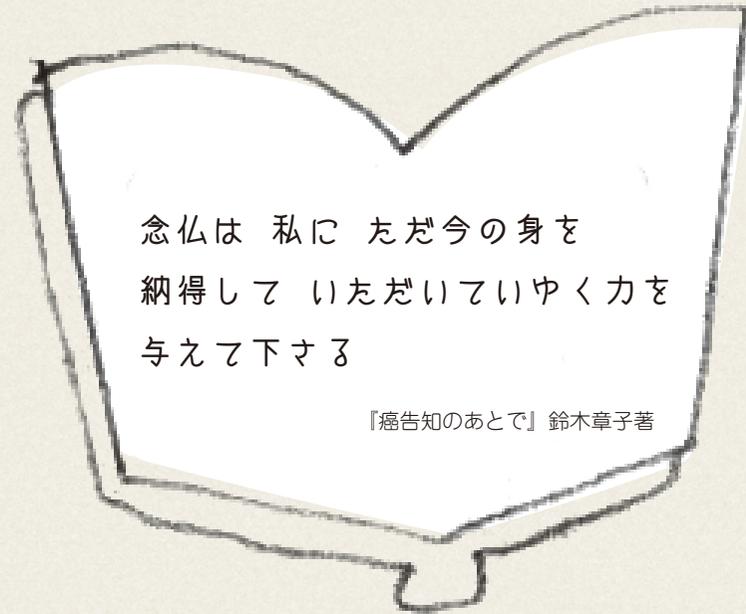


いのちの葉

大きな安心の世界



念仏は 私に ただ今の身を
納得して いただいでいやく力を
与えて下さる

『癌告知のあとで』鈴木章子著

■ 柳川 眞諦 やなかわ しんたい
布教使 / 東京

「まさか私のがんに」

雨の季節になりました。

恵の雨は仏さまのお慈悲のように、場所を選ばず、あらゆる「いのち」に平等に降り注いでいます。洗濯物が乾かないなどと愚痴をこぼしているのは人間だけかもしれませんね。

乳がんの手術から、今月でちょうど5年が経ちました。今も毎日、がん細胞の増殖を抑える薬を服用していますが、それ以外は普通の日常を送っています。しかし、あの日以来、私の中では何かが変わりました。

入浴中にたまたま乳房のしこりを発見した時、頭をよぎったのは、「もしや？」ではなく「まさか」でした。

あれほど、病む命、限りある命を生きているとお聞かせいただいていたのに、すべてが他人事。2人に1人が何らかのがんを発症する現実にも関

わらず、「まさか、私のがんになるはずはない…」と、そんな根拠のない確信の中に胡座をかいていたのです。そして、私は猛烈な「死」への恐怖に襲われました。

「まかせよ」「ハイ」

そんな時、思い出したのが鈴木章子さんの詩です。乳がんを患い、47歳で往生されるまで、お念仏を慶び、お念仏に生かされながら、たくさんの詩を残されました。冒頭の詩は遺著『癌告知のあとで』の最後に記された詩です。

「死」が他人事だと思っていた時、その詩は私の心を感動させ、勇気を与えてくれました。しかし、わが事となったとき、それは自分の心情とはかけ離れた、とても受け入れ難いものでした。

私は一人、本堂で阿弥陀さまに向き合いながらその理由を知りました。それは、今まで私は自分の思いで仏さまの声を聞いていたのだということです。阿弥陀さまは今、私の悲しみをわが悲しみとして一緒に泣いてくださっているはず…と見上げたお顔は、金色の光の中で「何も心配ない」というお顔でニコニコとほほ笑んでおられました。

その時、初めて、私がすでに大きな安心の世界に抱かれていたことを知ったのです。この命の先にお浄土は完成されてあったのです。

「まかせよ」

「ハイ」

ただ これだけ…

章子さんのこの詩のままに、お任せしかない「いのち」を今、私は生きています。